

『スケベゲーム交流会』のサンプル

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話 チンポ測定

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話 オナニー懺悔

第三話 着衣おもらし (白ブリーフ)

第四話 電気あんま

第五話 スパンキング

第六話 玉蹴り

第七話 デイルド

【あらすじ】

かつてのライバル校同士が経営上の理由で合併して新生したサッカー部であったため、上級生たちは、元・太平大学と元・根岸大学の派閥に拘り、チームプレイも満足にできない状態であった。

この状況を憂う監督の椎名勝平は、荒療治としてスケベゲーム交流会を提唱し、マネージャーである一年生の箕輪祐樹をスケベゲーム交流会のアシスタントに指名した。

元・大平大学サッカー部部長の赤城健斗と元・根岸大学サッカー部部長の笹原亨は、かつての派閥の垣根を壊すために、皆の前で恥を晒していく。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実中存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

箕輪勇樹（みのわ ゆうき）

18歳。男。太根大学サッカー部マネージャー。
椎名監督により、スケベゲーム交流会のアシスタントに指名される。

赤城健斗（あかぎ けんとう）

21歳。男。元・太平大学サッカー部部長、現太根大学サッカー部部長。童貞。
平常時7.7cm、勃起時21.6cmの勃起時も皮被りの仮性包茎チンポ。亀頭は黒い。

笹原亨（ささはら とおる）

21歳。男。元・根岸大学サッカー部部長、現太根大学サッカー部副部長。童貞。
平常時5.3cm、勃起時14.4cmのずる剥けチンポ。亀頭はピンク色。

椎名勝平（しいな かつぺい）

38歳。男。太根大学サッカー部監督。
元・太平大学と元・根岸大学の部員の派閥解消のために、スケベゲーム交流会を発案する。

井上・佐々木・橘

元・太平大学サッカー部部員。

長島・原野・毛利

元・根岸大学サッカー部部員。

第一話

太根大学サッカー部専用の講堂に入った箕輪勇樹は、いつもの居心地の悪さに心の中でため息をついた。

ゼミの教授に雑用を依頼されて集合時間十分前に講堂に入ったのだが、右側と左側、どちらの席につこうか悩んだのだ。

太根大学は、太平大学と根岸大学という二つの大学が合併して今年度から発足した大学だ。

つまり、二年生以上は元々太平大学と根岸大学という別の大学のサッカー部に所属していたのだが、これが問題であった。

太平大学と根岸大学はサッカーでのライバル校であった。

戦績も五分五分という切磋琢磨し合う関係であったのだが、この二つのサッカー部も太根大学発足に伴い合併された。

その結果、右手には元・太平大学のサッカー部部員が、左手には元・根岸大学サッカー部部員が集まって座っているように、かつての所属大学の派閥が根強く残っており、新入生である一年生もまた、上下関係に厳しい体育会系特有の事情も相まって、世話になっている先輩について派閥に属するようになっていく。

マネージャーとして活動している勇樹は、特定の先輩の世話になっていないので、綺麗に左右に分かれているこうした場面では、どちらの派閥の席に座るべきか悩むのだ。

かといって、綺麗に空いている真ん中の列に座るのも悪目立ちがして嫌だ。

勇樹は悩んだ末に、給湯器の近くという理由で左側の席に座った。

そこへ、太根大学サッカー部の新人監督である椎葉勝平が入ってきた。

「押忍！ 椎名監督！」

勇樹を含めたサッカー部部員は一斉に立ち上がり、椎名監督に頭を下げた。

「着席」

「押忍！」

椎名監督の言葉に、勇樹たちは返事をしてから着席した。

椎名監督が講壇に上がった。

「さて、本日集まってもらった理由は他ではない」

椎名監督がサッカー部部員たちを見回した。

「このサッカー部の問題について、確認をするためだ」

椎名監督の言葉に、勇樹は派閥のことだろうか、と考えた。

椎名監督が言う問題は、派閥問題以外に思いつかなかったのだ。

「今、ここから見回しても分かる通り、お前たちはまだ、太平大学と根岸大学に囚われている」

椎名監督の言葉にサッカー部部員たちが気まずそうな顔をする。

分かれて座っていることから分かる通り、サッカー部部員たちも自覚をしているのだ。

「いいか、お前たちがどんなに過去をなつかしもうと、太平大学と根岸大学は失われ、今、太根大学という新たな大学として進んでいる。

お前たちが太根大学サッカー部の一員としての自覚を持った行動をすることを期待し、これまではお前たちの自主性に任せてきた。

だが」

椎名監督が力強い眼差しでサッカー部部員たちを見回した。

「この半年、お前たちに進歩はなかった。

今の席順にしてもそうだし、試合でも連携が上手くいかない。

原因は明らかだ。

お前たちは過去に囚われ、未来へ進もうとしていない」

椎名監督の厳しい言葉に先輩たちが項垂れた顔をする。

「かつての大学の名誉を背負って切磋琢磨をしていたお前たちにとって、過去から卒業するのは大変なことだろう。

だが、未来へ進まなければ、太根大学サッカー部に未来はない。

だから」

椎名監督がサッカー部部員たちを見回した。

「今日は荒療治として、スケベゲーム交流会を行う。

赤城健斗」

「押忍！」

名前を呼ばれた元・太平大学サッカー部部長にして、現太根大学サッカー部部長の健斗が立ち上がった。

浅黒い地肌をしたラテン系のイケメンだ。

フォワードとしてチームの得点率に大きく貢献しているこのチームのエースでもある。

「笹原亨」

「押忍！」

元・根岸大学サッカー部部長にして、現太根大学サッカー部副部長の亨が立ち上がった。

健斗とは対照的に太い眉と力強い顔の造形が特徴的な大和男児だ。

その大柄な体躯は巨岩のようであり、事実、ゴールキーパーとしてこのチームの守りの要となっている。

「お前たちには、三名、仲間を選んでもらう。

そして、三名の仲間がゲームをし、健斗と亨にはチームの責任を取って罰ゲームを受けってもらう。

罰ゲームの内容はその時になるまで秘密だ。

分かったな」

「「押忍！」」

椎名監督の言葉に健斗と亨が頷いた。

「では、三名の仲間を選べ。

お前たちが特に信用する三名だ」

椎名監督の言葉に、健斗と亨が考え込む様子を見せた。

先に、健斗が顔を上げた。

「井上、佐々木、橘、頼む」

「「押忍！」」

健斗の指名に井上、佐々木、橘の三名が勢いよく立ち上がった。

「長島、原野、毛利、任せた」

「「押忍！」」

亨の指名に長島、原野、毛利の三名が勢いよく立ち上がった。

勇樹は、根深いな、と思った。

井上、佐々木、橘の三名は元・太平大学サッカー部部員であり、一方の長島、原野、毛利も元・根岸大学サッカー部部員なのだ。

結局、同じ派閥から仲間を選んでしまうのが、このサッカー部が抱える問題の根深さなのだ。

「よし、では井上、佐々木、橘の三名は亨の仲間だ。

長島、原野、毛利の三名は健斗の仲間だ」

椎名監督の発言にサッカー部部員たちが騒めいた。

椎名監督は派閥を逆転させたチームを組ませたからだ。

「井上、佐々木、橘、長島、原野、毛利。

お前たちは立派なスポーツマンである健斗と亨が選んだ面子だ。

間違っても同じ派閥を勝たせるために手を抜いたりはしないな」

「「「「「……押忍！」」」」」

椎名監督の問いかけに井上たちが戸惑った様子を見せながらも力強く返事をした。

「井上、佐々木、橘。

監督の仰る通りだ。

手を抜かずに亨を守れ、いいな」

「「押忍！」」

健斗の言葉に、井上たちが威勢良く返事をする。

「長島、原野、毛利。

お前たちも同じだ。

手を抜かずに全力で来い、いいな」

「「押忍！」」

亨の言葉に長島たちが威勢良く返事をする。

「それから、スケベゲーム交流会のアシスタントとして、箕輪勇樹を指名する。

お前は、俺を手伝ってくれ」

「は、はい！」

椎名監督の突然の指名に、他人事として見ていた勇樹は驚きながらも立ち上がった。

「勇樹、お前はどちらに肩入れすることなく、マネージャーの仕事を丁寧にこなしている。

その誠実さの価値を皆に示すんだ、いいな」

「は、はい！」

椎名監督の言葉に威勢良く返事をしたものの、勇樹は胃が重くなる気がした。

勇樹は集合写真の隅に立っているのが落ち着く性分なのだ。

それが、監督の指名とはいえ、皆の注目を集める立場に立たされたのは、正直に言って

負担だったのだ。

だが、体育会系である勇樹は、目上の者である椎名監督の言葉を拒めない。
引き受けるしかないのだ。

「では、最初のゲームはお互いの緊張を解す簡単なものにしよう。
サイコロを二つ振って、一番大きい目を出したものの勝ちだ。
いいな」

「押忍！」

椎名監督の言葉にサッカー部部員たちが大きく返事をした。

「俺から行きます」

長島が真剣な表情でサイコロを転がした。
カラカラと軽い音を立ててテーブルに転がったサイコロの目は三と四。
合計で七だ。

「次は俺だ。

八以上出るよ」

サイコロを握り締めた手を頭上に掲げてから、井上がサイコロを転がした。
出目は一と六。
合計で七だ。

「よし、この引き分けを俺の手で！」

原野が両手でサイコロを包み、祈るように目を閉じてから転がした。
出目は一と一。
最低値の二だ。

「よし、これは勝てる！」

佐々木がガッツポーズをしてからサイコロを転がした。
出目は六と三。
合計で九だ。

「この流れは不味いな」

毛利が渋い顔をしながらサイコロを転がした。
出目は五と四。
合計で九だ。

「うっわ、プレッシャーがかかるわ」

橘が大袈裟に身震いをしてからサイコロを転がした。
出目は一と一。
最低値の二だ。

「これ、同数ですね」

健斗が呟いた。

「監督、この場合はどうなるんですか？」

亨が椎名監督に尋ねる。

「そうだな。

スケベゲーム交流会に引き分けはない。

勝者がいないということは両方が敗者ということだ。

というわけで、健斗と亨の二人には罰ゲームを受けてもらう」

椎名監督の言葉に健斗と亨が真剣な表情をした。

勇樹もどんな罰ゲームが下されるのか分からず、緊張する。

「最初は軽い罰ゲームだ。

チン長測定を行う」

椎名監督の言葉に勇樹は驚いた。

このサッカー部は三十年ぐらい前に不祥事を起こして以来、下ネタにも厳しい風土を形成してきたという。

そんなサッカー部で、チンポを披露しろだなんて、ハードルが高いと思ったのだ。

健斗と亨も顔を見合わせているし、サッカー部部員たちも沈黙を守っている。

「なんだお前ら、興味ないのか。

サッカー部が誇るイケメンと大和男児のチンポだぞ。

それともあれか、そんなことはもう知っているのか？」

椎名監督の言葉にサッカー部部員たちが顔を見合わせる。

勇樹は椎名監督の隣に立っていたのでサッカー部部員たちの様子が見えたのだが、興味はあるけど喜んでいいのかどうか、という躊躇いの表情が見えた。

実のところ、勇樹も健斗と亨のチンポに興味はあるが、それを顔に出していいものか逡巡していた。

「なるほどな。

問題はここまで根深いわけか」

椎名監督が納得した様子で頷いた。

「いいか、お前ら。

チンポは男の宝だ。

その宝を披露するという行為は、全てをさらけ出す信頼の行為だ。

お前らが健斗と亨のチンポを喜べないのは、その信頼関係がないからだ。

健斗、亨、お前たちはこれでいいと思うか？」

「いいえ」

「……よくありません」

健斗と亨が首を振った。

「じゃあ、分かるな。

お前らはこの場を盛り上げないといけない。

チンポを見せることを喜んでもらわないといけないんだぞ」

健斗と亨が頷き合った。

「お前ら、俺のチンポが見たいかー？」

健斗がサッカー部部員たちに呼び掛けた。

「俺のチンポの方を見たいだろー？」

一方の亨はやけくそ気味にサッカー部部員たちに呼び掛ける。

亨の方はチンポを見せるのが恥ずかしいのだろう。

「俺のチンポが見たい奴は拍手しろ！」

健斗の叫びにサッカー部員たちが顔を見合わせてから拍手をした。

「俺のチンポが見たい奴は足を踏み鳴らせ！」

亨の叫びに、サッカー部員たちが足を踏み鳴らす。

「よーし、じゃあ俺のチンポを見ろよ！」

「俺のチンポを見逃すなよ！」

健斗と亨が大きな声で叫ぶと、サッカー部員たちが口笛を吹き鳴らした。

健斗と亨が服を脱ぎ始めた。

健斗は浅黒い肌のラテン系の顔立ちに相応しい、男の色気が漂う艶めかしい身体つきをしていた。

黒豹のような雰囲気のを漂わせる健斗が白のブリーフ一枚になる。

ダサさと子どもっぽさの象徴にされがちな白ブリーフだが、浅黒い肌の健斗が着用していると、その白ブリーフさえ、男の色気が漂ってくる。

健斗の白ブリーフは前方に向かって大きく盛り上がっていた。

健斗が白ブリーフに手をかけた。

黒いチン毛の茂みの下にぶら下がっていたのは、常人よりも大きな浅黒いチンポであった。

元々、肌が浅黒い健斗は下着の部分だけ色が白いということもない。

だから、チンポも浅黒いのだが、それが独特の魅力を放っていた。

そんな健斗のチンポに欠点らしい欠点を見出すとしたら、ドリル状になっている包皮だろう。

健斗のチンポは大きかったのだが、その大きいチンポを包んでなお余るほどに健斗の包皮は豊かだったのだ。

亨もまた下着一枚になった。

亨はキーパーを務めるだけあり、がっしりとした巨岩のような雰囲気を漂わせる力強い筋肉を纏っていた。

その下腹部を覆う黒のボクサーパンツは亨の男ぶりを強調しているが、そのもっこりは健斗のもっこりに比べると、ややボリュームが少なかった。

亨が黒のボクサーパンツを脱ぎ始めた。

日に焼けていない亨の下腹部は当然ながら色白で、黒々としたチン毛の茂みが強調されている。

その下腹部にぶら下がるチンポは、大きさこそ、健斗のチンポに比べて小ぶりではあったが、包皮が綺麗に向けているずる剥けチンポであった。

大きく張った亀頭はピンク色で性交渉と無縁ではないかとする者に推測させた。

「なんだ、包茎なのか、健斗」

「うるせー、大きさなら俺が勝ってるぞ」

健斗と亨が互いのチンポを挿し込みながら肘で脇腹を突き合う。

「よし、それじゃあ勇樹に計測してもらおう。」

「さあ、仕事だ」

勇樹は椎名監督から巻き尺を受け取ると、近くにいた亨に声をかけた。

「亨先輩、失礼します」

「おう、任せたぞ」

勇樹が声をかけると、亨が羞恥に顔を赤らめながら、腰に手を当ててチンポをぐいっと前に突き出した。

勇樹は亨のずる剥けチンポに巻き尺を当てた。

亨のずる剥けチンポは平常時の大きさが5.3cmであった。

「平常時、5.3cmです」

勇樹が報告をすると、椎名監督がにやりと笑った。

「亨のチンポは平均的なサイズだな。」

まあ、男は膨張率だ。気にするな」

「……押忍」

椎名監督にチンポを論評され、亨が小さく返事をした。

これは酷だな、と勇樹は思った。

チンポの大きさは男のデリケートな問題だ。

それを公表され、論評されるというのは勇樹ならば逃げ出したいことだ。

亨も羞恥に顔を赤らめているし、こんなことに慣れてはいないのだろう。

「よし、続いて勃起時のサイズの計測だ」

「ぼ、勃起時ですか！」

椎名監督の言葉に、亨が驚いた様子を見せた。

「当たり前だろう、チンポは勃起するものなんだ。」

ならば、勃起時のサイズも知らしめないとな。

それとも、亨はチンポに自信がないのか」

「……うす」

椎名監督の言葉に亨が震えながら頷いた。

「だからこそ、見せる必要があるんだぞ、亨」

椎名監督が亨の肩を掴んだ。

「いいか、今のお前はカッコいい部分だけ、仲間に見てほしいと思っている。」

だが、そんな上辺だけの関係で真の信頼関係が築けるか？

違うだろう？

ここには、お前のチンポを本気で馬鹿にするやつはいない。

仲間を信じろ、亨」

「……押忍」

椎名監督の言葉に亨が頷いた。

勇樹は恥辱を堪えながらも仲間への信頼を示そうとする亨の勇樹に感銘を受けた。

「よし、分かってくれたな。」

勇樹、亨のチンポを勃起させてやれ」

「分かりました。」

亨先輩、失礼します」

勇樹は亨のずる剥けチンポを握った。

初めて触れる他人のチンポは温かく、男の生命力に満ちていた。

勇樹は、上級生である亨のチンポを握っていることに背徳感を感じながら扱き始めた。

「……う……はあ……」

亨が小さく喘いでいる。

低い声と相まって、大和男児のエロスを感じさせる喘ぎ声であった。

勇樹は聞き耳を立てていたし、サッカー部部員たちも黙り込んで亨の小さな喘ぎ声を聞き漏らすまいとしている。

勇樹の手の中で亨のずる剥けチンポが徐々に大きくなっていく。

ずる剥けの亀頭がパンパンに膨れ、男らしさを増していく。

「……もう、いいぞ……」

亨が小さく囁いたので、勇樹は亨のずる剥けチンポから手を離れた。

亨の勃起チンポは、言っては悪いが並であり、勃起角度もほどほどであった。

「なんだ、膨張率があまりないな。

まあ、チンポが並みでもテクがあればセックスに不自由はしないさ」

椎名監督が笑いながら亨の肩を叩いた。

亨は羞恥に顔を歪めている。

「亨先輩、計測させてもらいます」

勇樹は亨の勃起チンポに巻き尺を当てた。

「……14.4cmです」

勇樹の報告を聞いて、椎名監督が亨の肩を叩いた。

「よし、亨。

お前のチンポサイズを皆に聞いてもらえ。

大事なチンポのサイズなんだ。

腹に力を込めて、堂々と発表しろ」

「押忍」

椎名監督の言葉に、亨が頷いた。

そして、亨が手を背中に組んで、腹を膨らませて大きく息を吸った。

「不肖、笹原亨のチンポサイズ！

平常時！ 5.3cm！

勃起時！ 14.4cm！」

亨が堂々と己のチンポサイズを叫んだ。

「もっとはっきりと言え！」

「不肖、笹原亨のチンポサイズ！

平常時！ 5.3cm！

勃起時！ 14.4cm！」

椎名監督の叱責に亨がもっと大きな声で己のチンポサイズを叫んだ。

「まだ恥が残っているぞ！」

「不肖、笹原亨のチンポサイズ！

平常時！ 5.3cm！

勃起時！ 14.4cm！」

三度、亨が己のチンポサイズを叫んだ。

腹に力を入れて叫んでいるため、亨が叫ぶたびに勃起チンポがぶらぶらと揺れている。

「よし、男らしくやりぬいたな」

「ありがとうございます！」

椎名監督が亨の尻を叩くと、亨が頭を下げた。

その顔には恥じらいが残ってはいたものの、一方で男らしさが増していた。

「よし、次は健斗のチンポサイズだ」

「よろしく頼むな、勇樹」

椎名監督の言葉に健斗が勇樹にウィンクをしてみせた。

亨よりも、いや、もしかしたらこのサッカー部で一番の巨根かもしれない余裕からだろうか、健斗の顔には恥じらう様子が見られなかった。

「では失礼します」

勇樹は健斗のチンポに巻き尺を当てようとした。

「待て、勇樹」

椎名監督が勇樹を制止した。

「亨が男らしく、亀頭までの長さを発表したんだ。

健斗も同様に亀頭までの長さで計測するべきだ。

何しろ、健斗はデカチンとはいえ、ドリルチンポだからな」

「ドリルじゃないっす」

健斗の反論に、サッカー部部員たちが笑いだした。

「そりゃそうだ。

皮でおマ○コは掘削できないしな」

椎名監督がにやりと笑った。

「それで、健斗は剥けるのか？」

「勿論ですよ」

「じゃあ、剥いて見せろ」

「押忍！」

健斗が己のドリルチンポの皮を剥いた。

露わになった健斗の亀頭は、チンポの大きさに相応しい黒々とした亀頭であった。

「あ」

だからこそ、勇樹は目ざとく見つけてしまった。

「おいおい、健斗。

オナニーティッシュが残っているじゃないか」

椎名監督が健斗の雁首に残っているティッシュの繊維を指差して笑った。

それに合わせるかのようにサッカー部部員たちも大声で笑いだす。

「笑うなよ、お前ら！」

健斗が声を荒げる。

「いやいや、オナニーティッシュは笑うだろ。

お前、後始末も気にしないぐらいシコシコぴゅっぴゅしているのか？」

椎名監督が健斗を揶揄う。

「仕方ないじゃないっすか。

彼女もない独り身は、オナニーティッシュを量産するしかないんですから」

健斗が不服そうに唇を尖らせた。

「なんだ、お前。

遊んでそんな外見の割に童貞なのか？」

「童貞っす！

セックスさせてくれる可愛い彼女、いつでも募集中！」

おどけた様子での健斗の言葉に、サッカー部部員たちが口笛を吹き鳴らす。

「そういえば、亨は童貞なのか？」

椎名監督がチンポを勃起させたままの亨に尋ねると、亨が顔を赤くした。

「み……未経験です」

「お前、そこは堂々と童貞と言え！

男らしくないぞ」

「男らしくないぞ！」

椎名監督の言葉に健斗が悪乗りをする。

亨が顔を赤くしながら叫んだ。

「俺は童貞です！」

大変だな、と勇樹は思った。

こんな羞恥を皆の前で味わわないといけないなんて、勇樹だったら耐えられないと思ったのだ。

「よし、お前たちが童貞だと分かったところで、チンポ計測だ」

「よろしく頼むよ、勇樹」

「はい」

勇樹はもう一度、健斗のチンポに巻き尺を当てた。

「凄い。

平常時で7.7cmです」

勇樹の言葉に健斗が胸を張った。

「待て待て、勇樹。

男は膨張率だぞ」

椎名監督の言葉にサッカー部部員たちがにやにやと笑っている。

健斗の膨張率が並みかそれ以下であることを期待しているのだろう。

「俺、チンポには自信があるんですよね。

勇樹、俺のチンポを勃起させてくれ」

「はい」

勇樹は健斗のチンポを握り、扱き始めた。

「ああ……いいぞお……」

押し殺すような喘ぎ声を出していた亨とは対照的に、健斗は大胆に喘いでいる。

チンポを扱っているだけだというのに、健斗の喘ぎ声に勇樹はドキドキしてしまう。

勇樹の手の中で健斗のチンポが大きくなる。

ぐんぐんと陰茎が太く長くなり、勇樹の手に余る。
それでもなお、健斗のチンポは大きくなっていく。

「すげえ」

サッカー部部員の誰かの眩きは健斗の本心でもあった。
それほどまでに健斗のチンポの膨張率は凄かったのだ。

「よし、パワーマックスだ」

健斗の言葉に、勇樹はチンポから手を離した。

健斗の勃起チンポは巨根と呼んで差支えのない迫力を備えており、天を貫くようにほぼ直立に勃起していた。

だが、だからこそ、健斗の巨根の瑕疵が目立った。

「なんだ、健斗。」

お前、勃起しても皮が戻るタイプの包茎か」

椎名監督が指摘をした。

健斗の勃起チンポは勃起してもなお、亀頭を包皮が覆う仮性包茎だったのだ。

「言わないでくださいよ、監督」

これまで開けっぴろげな様子を見せていた健斗が羞恥に震えた。

「手術しようとは思わなかったんすか！」

サッカー部部員の一人が手を上げて叫ぶと、他のサッカー部部員が笑いだした。

「手術なんて怖いに決まってるだろ！」

俺は歯科医のドリル音でも血の気が引くんだからな！」

健斗の言葉にサッカー部部員たちが笑い出した。

「自分の弱点をさらけ出すその姿勢、男らしいぞ、健斗」

「押忍！」

椎名監督の称賛に健斗が返事をした。

「よし、チンポ計測だ。」

皮を剥いて、亀頭の先端までの長さで測れよ」

「はい」

勇樹は健斗の包皮を剥くと、巻き尺を健斗の巨根の根元に当てた。

「……21.6cmです！」

勇樹の言葉にサッカー部部員たちが騒めいた。

「でけえとは思ったけど、20cm越えかよ」

「あんなんでガツガツされたら女も善がり狂うだろうな」

「皮被りでも巨根は巨根か。羨ましいぜ」

サッカー部部員たちが羨ましそうに健斗の巨根を見ている。

健斗は自慢するかのように腰をグイっと前に突き出している。

「よし、健斗も分かっているな。」

チンポサイズを大きな声で発表しろ」

「押忍！」

健斗が力強く頷くと、腰に手を当てて大きく息を吸った。

「俺のチンポサイズ！」

平常時！ 7.7cm！

勃起時！ 21.6cm！」

「巨根に相応しい声で叫べ！」

椎名監督が健斗を叱責した。

「俺のチンポサイズ！

平常時！ 7.7cm！

勃起時！ 21.6cm！」

健斗が腹に力を入れてより大きな声で叫んだ。

「お前の巨根に相応しい声はそんなものか！」

「俺のチンポサイズ！

平常時！ 7.7cm！

勃起時！ 21.6cm！」

健斗がもっと大きな声で叫んだ。

健斗の叫びに合わせて健斗の巨根がぶらぶらと揺れた。

「よし、これで第一ゲームは終了だ。

この調子で健斗と亨には、全てを曝け出してもらおうからな。

覚悟しろよ」

「「押忍！」」

椎名監督の言葉に健斗と亨が大きく返事をした。

勇樹は、次のスケベな罰ゲームのことを考え、ゾクゾクしていた。

殿上人に等しい上級生の痴態を、自分の手で晒すのかと思うと背徳感がこみ上げて仕方がなかったのだ。

奥付

『スケベゲーム交流会』のサンプル

初出：2022年8月23日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep